社会情報学と社会心理学
―群馬大学社会心理学セミナーの紹介を中心に―

柿本　敏克
社会心理学研究室

Toshikatsu KAKIMOTO
Social Psychology

1. はじめに

群馬大学社会情報学部は創設以来，アイデンティティの確立を求められ続けてきた。20 年を経過した現在でも，未だそれを求める人がいる。では，学部のアイデンティティの確立とは何を指すのか。形式的な面で言うと，本学部が標榜する「社会情報学」に，学問の世界―学界―の中でしかるべき位置を占めさせること，及び本学部がその中心になることである。これに加え，学問の外の世界との関わりを考慮すると，教員団メンバーや学生・卒業生が各界で活躍し，存在感を示すことが学部の評価を高め，学部のアイデンティティ確立に役立つに違いない。これらのことは本特別号の中で別に説明があるように，創設後 20 年しか経っていないとは言え，これまでの学部教員団・学生・卒業生の活躍によってある程度達成された。大いに喜ぶべきことである。ただし，これらは学部が外部から見られた時に，アイデンティティ確立を客観的に示す外形的基準に関する話しである。

では，学部のアイデンティティの確立を，内在的に捉えるとどうなるのか。端的に言うと内在的なアイデンティティの確立とは，自己認識の確立である。自分自身でこれが社会情報学である，これが社会情報学部であると考えることができるようなら，内在的な意味でアイデンティティが確立したということができよう。さて，ここで小さな問題が発生する。学部の「自己」認識というときの自己とは，誰の自己かという問題である。教員団メンバーの数は数十人，学生・卒業生の数は 1 期生から数えると 2 千人ほどになる。これほど多数の人間が，完全に同じ自己認識を持てるかは疑問である。そこで，結局，当初からの共通項であるところの，「情報科学の成果を生かし，諸学問の協力のもとに高度情報社会の諸問題の解決を図る」という部分のみが，学部の自己認識であると安心して言える部分であろう。それ以上の詳細については，各人の思い入れに応じて，自己認識の中味が少しずつ異なってこざるを得ない。

以下，本稿では，そうした思い入れのうちの筆者のバージョンに基づき，社会情報学と筆者の専門である社会心理学との関係について私見を述べ，さらにその関係を具体化したものとして，筆者がこ

のところ関わってきた群馬大学社会心理学セミナーの企画を紹介することとする。

2. 社会情報学と社会心理学

筆者が群馬大学社会情報学部に赴任したのは 2000 年 4 月と，学部創設から 6 年半が経過した後であり，設立当初の議論や理念を必ずしも共有しているわけではない。しかし先述のように，情報科学の成果を用いながら，諸学問の協力のもとに高度情報社会の諸問題の解決を図る，という部分は当初から広く受け入れられた考え方の一部と思われる。一方で，1993 年 10 月の学部設立以降，高度情報化社会の進展やグローバリゼーションその他，社会情勢の変化も大きく，さらに 2006 年 4 月には最初の 1 学部 1 学科から 1 学部 2 学科への組織改革も行われた。そうした変化に伴って，社会情報学あるいは社会情報学部の理念の強調点が，「人間と情報」，「社会と情報」という２つの柱に再編されているというのが現在の状況である。この現状認識に基づき，社会情報学と社会心理学の関係についての私見を，次に述べることとする。

2.1. 社会心理学の特徴と社会心理学から見た社会情報学

社会心理学は人の社会的行動の原理を追究する科学である[1]。ここで，社会的行動とは，他の人との関わりの中でなされる行動を言う。また研究対象となるレベルには，大きく個人，集団，社会の３つがあり，人間社会の多層性がそのまま反映されている。具体的に扱われるテーマは対人認知，コミュニケーション，人間関係，リーダーシップ，集団間の協力や競争，流言や流行など多様である。しかし，どのレベルの研究であれ，大きくいうと（人や集団・組織といった）主体間の関わりややり取りが重視されることに間違いはない。こうした特徴を持つ社会心理学から，社会情報学はどのように見えるのか。

まず，社会情報学が追求する「高度情報社会の諸問題の解決」の最初の部分，つまり高度情報（化）について言うと，高度な情報化あるいは情報の活用は，大脳が特に発達した人類，およびその人類が作り上げた社会にとっての必然である。つまりこれらは人の性質の中に，もともと織り込まれた性質であると言える。加えて言うと，人が情報をやり取りする存在であることは，先述のように社会心理学でも広く共有された考え方である。従って，そうした人間像を前提にした社会心理学は，社会情報学の前提である「高度情報」社会と，極めて親和性が高いことになる。

また社会情報学が追求する「高度情報社会の諸問題の解決」の次の部分（つまり「社会」）について言うと，社会心理学が人の社会的行動の原理の追及を目的とする限り，これが社会編成の基本原理の追究と重なることに間違いはない。従って，そうした目的を持つ社会心理学は，社会情報学の前提である高度情報「社会」に関しても，極めて親和性が高いことになる。

最後に，高度情報社会の「諸問題の解決」について言うと，多くの学問と同様に，社会心理学が究

---

[1] 多くの標準的な教科書に，この趣旨の社会心理学の定義が述べられている（例えば白樫，1997）。

極的には人類の福祉に役立つことを目標にすることに加え，特にアクションリサーチの伝統をもつことからも分かるように（矢守，2010），学問の性質としての応用志向も強い。こうした意味でも，社会心理学は社会情報学との親和性が高いことになる。

以上をまとめると，社会心理学から見て，社会情報学の志向性にはまったく違和感がなく，両者の発想はかなり一致していることが分かる。付言すると，「人間と情報」，「社会と情報」という２つの柱に理念の強調点が再編された社会情報学部の現状は，もともと社会と心理（「人間」）の 2 つの力点をもつ社会心理学にとっては，ごく馴染みのある状況と言え，学問的特徴と学部の現状との相同性が感じられる。このように見ると，筆者にとっての社会情報学部はかなりの程度，筆者の専攻である社会心理学と一体であり，これが筆者のバージョンの社会情報学および社会情報学部の認識であると言える。

2.2. 群馬大学社会心理学セミナーの企画意図

しかしここまでの議論は，社会情報学という学問（および学部）の特徴を全体として眺めた時の話しである。抽象的な議論であり，社会情報学に社会心理学がどのように関わるか，具体的なことは不明なままである。そこで，筆者が学部の承認のもとに企画・運営の責任者として携わってきた「群馬大学社会心理学セミナー」を取り上げ，上の抽象的議論の肉付けを行うこととする。このことが，社会心理学の各研究領域がどのようなものであり，それぞれの領域でどのような議論がなされてきたのかということの，ある程度の紹介になるはずである。それを通して，社会情報学と社会心理学とのゆるやかな結びつきが，具体的なイメージとして浮かび上がることが期待される。

まず，「群馬大学社会心理学セミナー」の企画意図について説明する。

このセミナーは，群馬大学社会情報学部が 2 学科体制に改組されて 1 年が過ぎ，新体制のもとでの運営が軌道に乗りはじめた 2007 年度初めに，学部主催の行事として企画された。改組前に社会・情報行動講座主催で実施されていた何回かの特別講演会を受け継ぎ[2]，社会心理学の各分野の第一人者からまとまった量のお話をいただきつつ，学内外の研究交流の場としようという構想であった。このことにより，普段接することの少ない各分野の研究の広さと深さに学生が直接触れる機会を提供するとともに，群馬大学荒牧キャンパスにおける関連領域の研究活動をより一層活性化させることが期待されていた。そのあとすぐ，関係諸氏からの助言を取り入れ，２つの機軸が追加された。その第 1 は，一流の研究者による講演という折角の機会をより地域に開かれたものとすべく，2008 年度より群馬大学地域連携推進室の協力を得て，当セミナーを群馬大学公開講座としても位置づけたことであった。このことにより，一般市民が一層参加しやすいものになったと思われる。2 つ目の試みは，講演会形式

[2] 2000 年 4 月の筆者の群馬大学着任以降，社会心理学関係では合計 3 回のセミナーが開催された。各回の講師は，第 1 回が D. Abrams 先生（英ケント大学）（題目「人はどのように他者とかかわるのか？―人の社会行動理解のためのひとつの社会心理学的アプローチ―」2001 年 2 月 2 日），第２回が川浦康至先生（横浜市立大学：当時）（題目「メディアコミュニケーションの社会心理学」同 6 月 1 日），第３回が松井豊先生（筑波大学）（題目「災害遺族の心理過程」同 11 月 30 日）であった。

のセミナーの他に，参加者の間でより活発な議論のできるような小集会形式のものを加えることであった。こちらには，テーマをやや絞り，特定の研究領域の第一線でご活躍中の若手研究者を中心にお招きすることになった。小集会形式のセミナーについての紹介は今回省略するが，ともあれ，この形式が多少の調整を伴いつつ，現在まで続けられている。

3. 群馬大学社会心理学セミナーの紹介

次に，以上のような意図のもとで企画された群馬大学社会心理学セミナーの，これまでの開催内容の概要を，それぞれの報告書の記述に基づいて紹介する。それぞれ社会心理学の各領域の第 1 人者が行った講演の概要紹介となっている。[3]

3.1. 群馬大学社会心理学セミナーのこれまでの開催一覧

最初に，2007 年度から続けられてきたセミナーの，各回の演者氏名・題目等の一覧を示す（表 1）。2007 年に 4 回実施された外は，毎年 1 回ずつ開催されている。全てのセミナーが学部主催企画であるが，特に第 5 回と第 10 回のセミナーは，開催年度が学部にとって節目の年であるため，それぞれ社会情報学部創設 15 周年記念事業，20 周年記念事業と位置づけられている。また，先に述べたように 2008 年度（第 5 回セミナー）以降は，群馬大学公開講座としても位置づけられ，一般市民が参加しやすいものになっている。さらに，2009 年度の第 6 回セミナー以降は，2008 年 10 月に発足した学部附属社会情報学研究センターの共催事業と位置づけられている。

3.2. 各回の開催内容の概要紹介

次に，開催年ごとに，それぞれのセミナー内容の概要を紹介する。

2007 年度（第 1 回～第 4 回セミナー）　学部主催企画としての最初となる 2007 年度には，次にあげる，著名な 4 人の先生方に講師としてお越しいただき，それぞれ高度に専門的な内容を，水準を保ったまま分かりやすくお話しいただいた。お名前を挙げると，第 1 回セミナーから第 4 回セミナーまで順に，外山みどり（学習院大学文学部教授），村田光二（一橋大学大学院社会学研究科教授），木下冨雄（国際高等研究所フェロー，　京都大学名誉教授），広瀬幸雄（名古屋大学大学院環境学研究科教授）の各先生であった。全体にアカデミックな雰囲気の中，学内外の研究者，一般市民も含めた延べ 200 名近くの聴衆を得ることができ，賑やかに初年度を飾ることができた。

内容の詳細は，それぞれの講演録を収めた報告書で知ることができるが，ここで全体を振り返るために，簡単にそれぞれの概要を確認する。

第 1 回セミナーの講師の外山みどり先生は社会的推論研究の第一人者であり，1990 年代から活発に

[3] この部分は，これまでに刊行された各年度のセミナー報告書（柿本，2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013）の記述に基づき，適宜，加筆修正したものである。所属・職名・役職などの記述は，すべて当時のものである。

表 1. 群馬大学社会心理学セミナーの各回の演者氏名・題目

開催回（年月日）	演者氏名（所属・職名等）[注1]・ 題目[注2]
第 1 回 （2007 年 5 月 23 日）	外山みどり先生（学習院大学文学部教授） 「社会的推論研究の最近の話題 ―意識的過程と無意識的過程」
第 2 回 （2007 年 7 月 7 日）	村田光二先生（一橋大学大学院社会学研究科教授） 「社会的認知研究の最近の話題 ―オリンピック報道と日本人・外国人イメージ」
第 3 回 （2007 年 10 月 31 日）	木下冨雄先生（国際高等研究所フェロー， 京都大学名誉教授） 「リスク研究の最近の話題 安全・安心社会にどう対応するか ―リスクコミュニケーションの思想と技術」
第 4 回 （2007 年 11 月 14 日）	広瀬幸雄先生（名古屋大学大学院環境学研究科教授） 「環境行動研究の最近の話題 ―EU における環境計画への市民参加とその社会的受容」
第 5 回 （2008 年 10 月 23 日）	大渕憲一先生（東北大学大学院文学研究科教授） 「紛争解決研究の最近の話題 社会的排斥と不適応 ―実験社会心理学的検討」
第 6 回 （2009 年 10 月 29 日）	大坊郁夫先生（大阪大学大学院人間科学研究科教授） 「対人コミュニケーション研究の最近の話題 ―対人関係の心理学」
第 7 回 （2010 年 10 月 21 日）	杉万俊夫先生（京都大学大学院人間・環境学研究科教授） 「コミュニティのグループ・ダイナミックス」
第 8 回 （2011 年 10 月 28 日）	白樫三四郎先生（大阪経済大学客員教授・大阪大学名誉教授） 「グループの社会心理学 ―集団の愚かな意思決定」
第 9 回 （2012 年 12 月 10 日）	浦 光博先生（広島大学大学院総合科学研究科教授） 「排斥と受容の行動科学」
第 10 回[注3] （2013 年 11 月 8 日）	池田謙一先生（同志社大学社会学部メディア社会学科教授） 「社会のイメージのリアリティ ―社会心理学の視点から」

注1 所属・職名等はセミナー開催当時のものを記載した。
注2 書式を統一した。
注3 2013 年分は本稿執筆時点でまだ開催されていないため，予定として記載した。

なってきた自動的過程にかかわる諸研究にも深い造詣をお持ちである。社会的推論研究は，一般に人が他人や自分の行動の原因をどのように推論するか，身の回りに起こるさまざまな出来事をどのように解釈し理解するかといった内容を扱う研究領域であるが，セミナーでは「社会的推論研究の最近の話題―意識的過程と無意識的過程」という題目でご講演いただき，心理学の大きな動向のなかでの自動性の問題を，近年の「適応的無意識」に関する論争も含めて分かりやすくお話しいただいた。

第 2 回セミナーでお話しいただいた村田光二先生は社会的認知研究の第一人者である。社会的認知研究とは，人や集団，組織・制度といった広範な社会的対象の認知，それに関わる推論や判断などを扱う分野であるが，村田先生はなかでも特にステレオタイプに関わる諸研究にお詳しい。セミナーでは

「オリンピック報道と日本人・外国人イメージ」という題目で，社会的ステレオタイプの具体例としての日本人・外国人イメージについて，オリンピック・ソウル大会以降のパネル調査結果にもとづく，日本人・外国人イメージの変化，それに対する愛国心とナショナリズムの影響などについてお話しいただいた。

第３回セミナーではリスク研究の第一人者である木下冨雄先生を迎え，「安全・安心社会にどう対応するか–リスクコミュニケーションの思想と技術–」という題目でお話しいただいた。木下先生は日本社会心理学会の理事長と，日本リスク研究学会の会長をつとめた方でもある。最初，社会心理学がいかに現実の社会問題に取組んできたかについて簡潔にご紹介いただき，その上で現在の問題としてリスク及びリスク認知を位置づけた後，リスクとはそもそも何か，リスクコミュニケーションのあり方と民主主義の思想，信頼感との関わりなど，洞察に富む幅広いお話をうかがった。

最後の第４回セミナーでは環境行動研究の第一人者である広瀬幸雄先生を迎え，「ＥＵにおける環境計画への市民参加とその社会的受容」という題目のお話しをいただいた。群馬大学では 2002 年から集団間の競争と協力，環境問題などをテーマとするシミュレーション・ゲーム，「仮想世界ゲーム」を実施しているが，広瀬先生はその開発者でもある。ご講演ではＥＵのうち特にドイツのカールスルーエにおける環境計画，なかでも公共交通システムに対する市民参加型合意形成の仕組みに関する詳細な説明とともに，それが市民にどのように受容されているかを社会調査によって探った研究をご報告いただいた。

以上４つのセミナー全体を通して眺めると，厳密な実験研究が特徴的な社会的推論の領域（第 1 回），スポーツイベントの報道と各国イメージの変化を長期的に辿った応用的試み（第 2 回），現実の社会問題の解決を指向したリスク研究や環境行動研究（第 3 回，第 4 回）というように，社会心理学の方法と内容の多様性を示す取り合わせとなった。全体として，学生諸君にとって学外の著名な研究者の話を聞く貴重な機会であったとともに，われわれ研究者にとっても大いに刺激となる研究交流の場となったと言える。

2008 年度（第 5 回セミナー）　2008 年度の第 5 回セミナーには，日本犯罪心理学会の前会長で，アジア社会心理学会機関誌副編集長の大渕憲一先生（東北大学大学院文学研究科教授）をお招きした。大渕先生は攻撃行動の研究でよく知られており，紛争解決研究の第一人者である。最近は社会的公正についても精力的に研究を進めておられる。

今回は「社会的排斥と不適応 ―実験社会心理学的検討」という題目でご講演いただいた。集団からの排斥・人間関係における拒絶といった社会的排斥がいかに人の主観的幸福感を損なうか，それが暴力，自殺といった社会病理，および心身の病気といった個人的病理にいかに関わるかということについて，海外の研究例やご自身の研究室で行われた実験研究の具体的内容を交えて分かりやすくお話いただいた。講演後の質疑応答の時間には，大渕先生が犯罪心理学会の会長をされていたことも関係してか，法律の実務家や一般市民からも熱心な質問・コメントが寄せられた。先述の通り，2008 年は社会情報学部設立 15 周年にあたっており，本セミナーはその記念事業プログラムでもあった。公開講

座として一般市民の聴衆を念頭に置きながらも，記念事業にふさわしく，高い学術的水準を保ったお話しであった。学生諸君にとって，また地域社会にとって貴重な機会であったとともに，前後の研究会とあわせて，研究交流の場としての役割も十分果たすことができたと言える。

2009 年度（第 6 回セミナー） 2009 年度の第 6 回セミナーには，日本社会心理学会の前会長で，直前に開催された日本社会心理学会第 50 回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会合同大会の準備委員長を務められた大坊郁夫先生（大阪大学大学院人間科学研究科教授）をお招きした。大坊先生は対人コミュニケーションの研究でよく知られており，中でもノンバーバル・コミュニケーション研究の第一人者である。最近は社会的スキル・トレーニングの開発・普及にも精力的に取組んでおられる。

今回は「対人コミュニケーション研究の最近の話題 ―対人関係の心理学」という題目でご講演いただいた。Well-being（主観的幸福感）を高める重要な要素としての対人コミュニケーションについて，表情の表出・解読についての文化比較，身体動作と対人関係との連動性といったテーマに関するご自身の最新の研究成果のご紹介とともに，近年開発に取組まれている対人関係の円滑さを高めるための社会的スキル・トレーニングのプログラムに関して，楽しい実習を交えてお話しいただいた。軽やかで生き生きした話しぶりの中にも，その道の専門家ならではの研究の蓄積とそれに由来するであろう，人間社会にとっての当該研究領域の意義と展望が示されていたように思う。公開講座として見ると，多くの人にとって日頃は気づかないものの，言われてみると日常生活と直結するような身近な内容が中心であった。それだけに，講演後の質疑応答の時間には，少なからぬ一般市民から熱心な質問・コメントが寄せられた。研究交流と学生教育の場としては勿論のこと，地域社会にとっても貴重な機会であったと言える。

2010 年度（第 7 回セミナー） 2010 年度の第 7 回セミナーでは，日本グループ・ダイナミックス学会の元会長で，国際応用心理学会フェロー，現在，組織学会評議員などでご活躍の杉万俊夫先生（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）をお招きし，本企画の３つの目標（研究交流と学生教育，地域への開放）を達成するのにまことに相応しいテーマでご講演いただいた。杉万先生はグループ・ダイナミックスの理論家としてよく知られるとともに，長年にわたって各地のコミュニティ活性化の実践に携わってこられた[4]。阪神・淡路大震災の際の避難所や災害救援ボランティアの組織化に関する研究もされている。

今回お話しいただいたのは，「コミュニティのグループ・ダイナミックス」というテーマについてであった。最初にグループ・ダイナミックスという学問領域を簡単にご紹介いただいた後，「規範の伝達」というキー概念を中心にその理論のエッセンスを手際よくご説明いただいた。それに続いて，このキー概念を軸として，「コミュニティが変わる」とはどういうことかを，ご自身が関わられた次の４つの事例 ―（1）市民グループによる「学校」教育，（２）過疎地域の活性化，（３）住民主体の地域医療，

[4] これらの思索・活動の集大成である著書を，最近出版されている（杉万，2013）。

（4）砂漠の緑化― を通して大変分かりやすく整理していただいた。ご自身の長年の実践にもとづくお話しだけに，理論的概念がただの概念に終わることなく，具体的な内実をともなって伝わってくる説得力のあるご講演であった。講演後の質疑応答の時間には，コミュニティ活動のあり方・運営について，また「学校」にまつわる人びとの行動の変化等について，一般市民・研究者からの熱心な質問・コメントが寄せられた。上で述べた３つの柱（研究交流と学生教育，地域への開放）が見事に達成でき，参加した 200 名近くの学生・一般市民・研究者のそれぞれにとって貴重な機会となったと言える。

2011年度（第8回セミナー）　2011年度の第8回セミナーでは，日本グループ・ダイナミックス学会の名誉会員で，組織学会常任理事，産業・組織心理学会常任理事，日本社会心理学会機関誌編集委員などの役職を歴任され，現在，大阪経済大学客員教授，大阪大学名誉教授としてご活躍中の白樫三四郎先生をお招きし，同年度の統一テーマ「集団と個人のダイナミックス」にまことに相応しい内容でご講演いただいた。白樫先生はリーダーシップ研究でよく知られるとともに，長年にわたり広く集団（グループ）に関する行動科学にかかわる研究に携わってこられた。

今回お話しいただいたのは，「集団の愚かな意思決定」というテーマについてであった。最初に集団（グループ）を対象とする専門領域であるグループ・ダイナミックスとその創始者であるクルト・レヴィン氏について，有名な民主的・専制的リーダーシップ実験の裏話も交えてご紹介いただいた。その後，一定の条件のもとで集団が陥る独特の思考様式である集団的浅慮について，ケネディ大統領と側近たちによるキューバ侵攻作戦，ニクソン大統領と側近たちによるウォーターゲート事件を例に，詳細な分析を示していただいた。また，集団的浅慮の条件とされている集団凝集性が必ずしも必要でない可能性について，ウォーターゲート事件およびオウム真理教の教祖と高弟たちの事例をもとに論じていただき，最後に集団的浅慮をいかにして防ぐことができるのかについてもご提言いただいた。

地下鉄サリン事件などを引き起こしたオウム真理教の教団内ダイナミックスという，日本のわれわれに比較的近い事象をも大胆にとりあげた，気迫のこもったご講演であった。講演後の質疑応答の時間には，指定討論者の岩井淳先生（群馬大学准教授）のほか，一般市民・研究者からの熱心な質問・コメントが寄せられた。また，最後のご提言（「少数意見であっても勇気をもって主張するべきだ」）に多くの学生・一般市民が強く印象づけられたことが回収したアンケートからも読み取れた。先述の本企画の３つの柱（研究交流と学生教育，地域への開放）が達成でき，参加した 170 名ほどの学生・一般市民・研究者のそれぞれにとって貴重な機会となった。

2012 年度（第 9 回セミナー）　統一テーマを「社会心理学の学際的展開」と設定した 2012 年度の第 9 回セミナーでは，日本グループ・ダイナミックス学会の前会長で，日本社会心理学会理事，産業・組織心理学会常任理事，日本社会心理学会機関誌編集委員などの役職を歴任され，現在，日本心理学会編集委員などでご活躍中の浦 光博先生（広島大学大学院総合科学研究科教授）をお迎えし，同年度のテーマにまことに相応しい内容でご講演いただいた。浦先生はソーシャル・サポート研究でよく知られるとともに，近年では，対人関係や集団からの社会的な排斥や拒絶の検知とそのインパクト制御

のメカニズムについて，幅広くご研究を進めておられる。

今回は，「排斥と受容の行動科学」というテーマでお話しいただいた。社会的分断をもたらす経済格差が大きな地域ほど人への不信感が高く，さらに死亡率も高いという調査研究の紹介を皮切りに，人と人のつながりが断ち切られることがいかに深刻な問題につながるか，それを緩和する要因にどのようなものがあるかについて，先進的な神経科学的指標を用いたご自身の実験研究を交えて，高い水準を保ちつつ分かりやすくお話しいただいた。幼少期の家庭環境がよいと，拒絶されることの社会的痛みの影響が緩和されることや，少し先の時間的展望をもつことがよい効果を生むことなど，意外な要因が関係しているらしいことを学ぶことができた。

社会的痛みを緩和する要因についてご研究される際には，心理社会的資源という考え方を採用されているとのご紹介もあった。心理社会的資源とは，人が困難な状況のなかでも適応的に生きていくことを可能とするような資源を指すとのこと。人々のネットワークやソーシャル・サポート，自尊心やコントール感，経済的な地位や格差といった，社会学や心理学，経済学などの学問領域で扱われてきた概念をまとめて統一的に扱おうとするアプローチを取られているとのことであった。神経科学的な技法を取り入れておられることとともに，先に述べた同年度の統一テーマをまさに具現化したご研究アプローチと言える。

講演後の質疑応答の時間には，指定討論者の熊谷智博先生（大妻女子大学文学部助教）をはじめ，学内外の研究者，一般市民からの熱心な質問・コメントが寄せられた。特に一般市民の参加者が例年以上に多く，予算の制限から結果的に実現できなかったものの，一部から連続講義を希望する旨の発言もあった。このテーマに対する一般の関心の高さがうかがわれる。また，学内外の研究者との間でかなり専門的なやり取りもあったが, それにより, かえって問題がはっきりと理解できたとの感想が, 参加した学生や一般市民から複数寄せられた。参加した 160 名ほどの学生・一般市民・研究者の各々にとって貴重な機会となったと言える。

3.3. 群馬大学社会心理学セミナーから見えるもの

最後に，以上の 9 回のセミナー全体から見えるものについて，ごく簡単に述べておく。ここでは厳密な論証は省略するが，全体としてみると，やはり社会心理学の扱う個人，集団，社会の各レベル，および多くの場合にそれらを跨ぐようなテーマが各セミナーごとにそれぞれの観点で扱われていると言える。人と集団，社会のそれぞれのレベル（さらにここに，コミュニティを付け加えてもよい）で存在する問題をいかに解決し，人間と社会（・コミュニティ）の幸福をいかに達成するかということが，それぞれのやり方で問われているのである。もちろんそれら各レベルが相互に関連していることも，暗黙のうちに，あるいは明示的に前提とされている。当然その際には，神経細胞の活動から価値観の共有や啓蒙といったレベルまでを含む，多様な情報の主体間のやり取りが分析の対象として，あるいは評価の基準として用いられている。こうした人間観・社会観，そして問題解決志向は，最初に述べたように社会情報学のそれとかなり一致しているということができるだろう。

4. おわりに

以上，まず社会情報学が，筆者の専門である社会心理学とかなり親和性の高いものであり，かつ基本的な志向性が両者で共有されていることを主張した。さらにこの関連をゆるやかに示すものとして，筆者が関わってきた群馬大学社会心理学セミナーの企画を紹介した。

学部創設 20 周年にあたって，学部主催企画の一つを担当した者として以上の報告を行った。

謝辞

この小論を書く機会を与えていただいた学部創設 20 周年記念号編集委員長と，群馬大学社会心理学セミナーの開催に理解を示し続けていただいた，歴代の学部長および教員団メンバーにお礼申し上げる。

引用文献

柿本敏克 編（2008）.「平成 19 年度群馬大学社会心理学セミナー報告」，群馬大学社会情報学部.
柿本敏克 編（2009）.「平成 20 年度群馬大学社会心理学セミナー報告」，群馬大学社会情報学部.
柿本敏克 編（2010）.「平成 21 年度群馬大学社会心理学セミナー報告」，群馬大学社会情報学部.
柿本敏克 編（2011）.「平成 22 年度群馬大学社会心理学セミナー報告」，群馬大学社会情報学部.
柿本敏克 編（2012）.「平成 23 年度群馬大学社会心理学セミナー報告」，群馬大学社会情報学部.
柿本敏克 編（2013）.「平成 24 年度群馬大学社会心理学セミナー報告」，群馬大学社会情報学部.
白樫三四郎 編（1997）.「社会心理学への招待」，ミネルヴァ書房.
杉万俊夫（2013）.「グループ・ダイナミックス入門 ―組織と地域を変える実践学」世界思想社.
矢守克也（2010）.「アクションリサーチ―実践する人間科学」，新曜社.